

京華商業高等学校

学校寄席

芸術鑑賞会

紙工劇落語

紙切り作：三代目 林家正楽

プログラム

第一部 寄席芸能

一、寄席入門
よせにゆうもん

古今亭今いち

二、色物

林家二楽
《紙切り》

三、落語

古今亭今いち

（お仲入り（休憩））

第二部 落語と紙切りのコラボ

四、紙工劇落語
しこうげきらくご

桂山南
《落語》

林家二楽
《紙切り》



かつら こなん
桂小南 《紙工劇落語》



ここんてい いまいち
古今亭今いち



はやしや にくらく
林家二楽

～生徒の皆さんへ、お願いとお知らせ～

- 公演中の他の生徒さんとの私語はつつしんでください。
- 当日の生徒さん個人による写真撮影はお断り申し上げます。
- 携帯電話、アラーム付き時計等をお持ちの生徒さんは、開演前にあらかじめスイッチをお切りください。

2023年2月1日（水）

なかのZERO（もみじ山文化センター）

落語入門 落語をご鑑賞いただく前に・・・

落語の歴史

落語の原点と考えられるのは、室町時代・戦国時代に武将に仕えた「伽衆（おとぎしゅう）」という存在です。彼等は娯楽の少なかった当時、世情などを機知に富んだ巧みな話術で、おもしろおかしく人々に聞かせていました。その後、天下太平の江戸時代には様々な芸能を育む機運が熟し、落語もその一つとして勃興します。この頃から落語を職業とする露の五郎兵衛などが登場し、さらには江戸の鹿野武左衛門や大阪の米沢彦八らに継承され、その土台が定着するのです。そして江戸末期から明治時代において三遊亭円朝がそれまでの落語を集大成し、近代落語の基礎を作り上げます。

落語の形態

■階級

前座（ぜんざ）：弟子として入門し、師匠や兄弟子の用事や寄席での雑用などをこなす傍ら、基礎的なネタや礼儀を習得する見習い期間。まともな扱いが受けられず、常に気をゆるめることができない立場にあります。

二ツ目（ふたつめ）：前座時代の雑用から解放され、初めて羽織を着ることを許されます。落語家としての存在をやっと認められますが、修行を続け、数多くの噺を習得しなければなりません。

真打（しんうち）：真打昇進までには、少なくとも入門から10年を要します。真打になると師匠と称され、弟子を取ることができるようになります。またその芸歴により、若手真打・中堅真打・大看板真打に区分されます。

■寄席

落語を軸とした演芸が演じられる場所。現在でも東京・大阪を中心に点在し、年中無休で興行しています。

■色物

落語会において、途中のところどころで構成される落語以外の演芸の総称で重要な要素。曲芸・奇術・漫才・紙切りなどがあります。

■小道具

使われる小道具は扇子と手拭いだけです。これらを色々なものに見立て落語の演出効果として利用します。

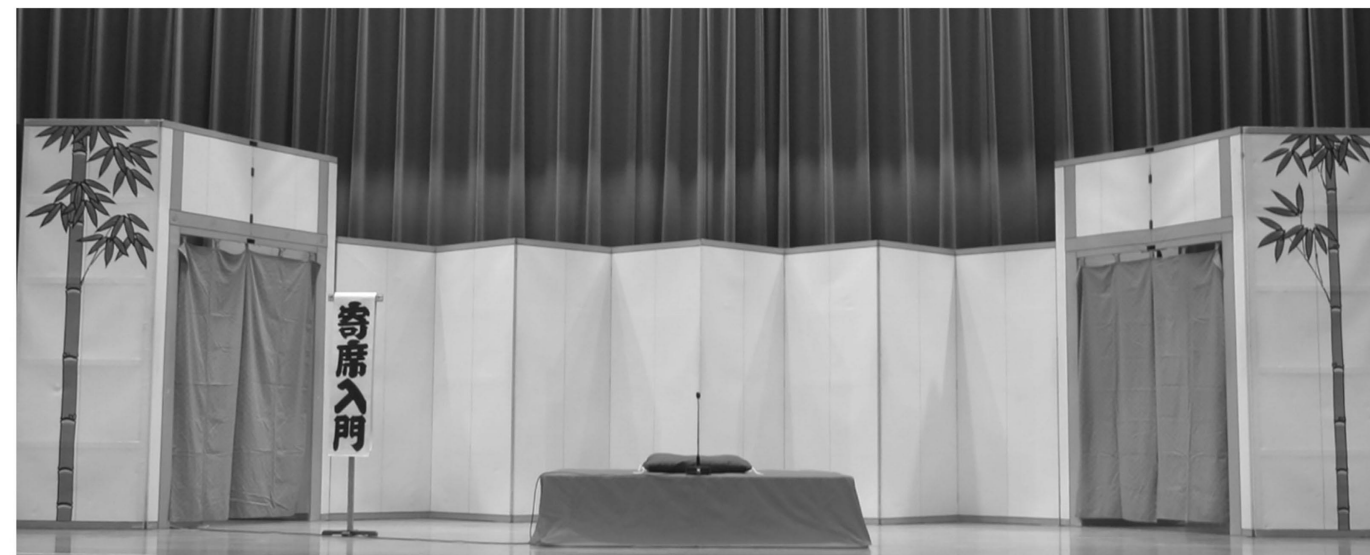
■鳴り物

お囃子の三味線や笛、前座の太鼓など、寄席のBGM全般の総称。一般的には三味線・太鼓・笛・鉦（かね）などで構成されています。

一番太鼓：開演の約30分前に叩き、「どんどん dont 来い」と大太鼓だけでゆっくりと打ちます。また打ち始める前に、太鼓の周りを、パチでカラカラと音を立てて回しますが、この音は寄席の木戸を開ける音を象徴しています。

二番太鼓：大太鼓・シメ太鼓・笛によって、「お多福来い来い」とにぎやかに演奏されます。

追い出し太鼓：終演時に大太鼓だけで「出て行け出て行け（失礼ながら…）」と聞こえるように叩きます。



寄席舞台

紙切り落語



色物人気 No. 1 の『紙切り』と『落語』が合体。

兄・桂小南（落語家）と弟・林家二楽（紙切り）。

紙切り名人として一時代を拓いた二代目・林家正楽を父するサラブレッド兄弟による落語と紙切りの出会い（共演）。

日本が誇る一人芸、落語。その言の葉を小南と二楽が、噺とハサミで切る。兄弟ならではの絶妙な掛け合いと、スクリーンに投影された奇想天外の映像、そのかつて無い発想のライブパフォーマンスは、噺のイメージを膨らませ初めて落語に触れる方にも親しみやすく、伝統芸能の新たな可能性を見出します。



あじゃらかモクレンキューライス テケレツツのパー



弟：林家二楽《紙切り》

兄：桂小南《落語》